

公開東北フォーラムから

バー・ボルドー氏に モンゴル相撲「ブフ」を聞く

4月3日の東北フォーラムは日本ウェルネス・スポーツ大学准教授のバー・ボルドー（富川力道）氏（写真）をお招きして、モンゴル相撲「ブフ」のお話を聞いた。

当日は日本海で急速に発達した低気圧の影響によって、全国的に大荒れの天気となり、首都圏の交通機関も大混乱に陥り、はたして参加者が何人集まるかと心配したが、モンゴル好き、相撲好きの人たちを中心に20人以上の参加者があり、関係者一同ホッとした次第。

講師のバー・ボルドー氏は、モンゴル相撲学生ブフ大会で連続3回優勝したつわもので、さすがにがっちりした体つきが印象的であった。日本の大相撲におけるモンゴル出身力士の活躍

は目覚しいが、彼らの力と技の基礎にあるモンゴル相撲「ブフ」について日本人の知るところは少ない。お話の中から興味深かった点を、講師のパワーポイントの写真を借りながら、いくつかご紹介する。



写真1 ブフ大会

（写真1）で、2011年9月17日（25日）にかけてモンゴル共和国で史上最大のブフ大会が開かれた。小さくて見にくいのがこれは全部力士である。最年少15歳から最年長は80歳まで、6002人が参加。ギネスブックに登録された。

さて一口にブフと言っても、大きく分けると対峙型と組合型に分かれ、さらにそれぞれも幾つかに分かれるという。対峙型というのは日本の相撲のように離れた位置から組み手を争って競技が始まるもので、組合型というのは最初から一定の組み手を組んでいて、取り組み中は組み手を変えないものだが、この組合型は衰退しつつあるようだ。対峙型にはハルハ・ブフ（モンゴル国）とウジウムチン・ブフ（内モンゴル）があり、この2つがブフの二大主流となっている（写真2）。面白いのは同じ対峙型のハルハ・ブフとウジウムチン・ブフでもそれぞれ特徴があり、勝ち負けの判定の仕方からして違うのである。



写真2 ハルハ（左）とウジウムチン



写真3 まだ勝負はつかない



写真5 獅子の舞

の記述もある。「元朝秘史」でもチンギス・ハーンがブリ・ボコとベルグテイの2人に相撲をとらせるよう指示したとの記述がある。おそらくモンゴルの遊牧文化がブフをはぐくんできたものである



写真4 鷹の舞

共通である。したがって投げ技、足技が豊富で、その数600種にも上るといふ。また昔は長時間勝負がつかない取組みがあったが、2003年からハルハ・ブフでは10〜15分の制限時間が設けられた。

それではモンゴルのブフはいったいいつごろ生まれたのだろうか。詳しいことは分からないが、各地の岩絵に登場している(写真6)から、相当古くからあったことは間違いない。その後、英雄叙事詩「ジャンガル」にも両雄が戦いをブフで決着する話や、英雄の嫁取りは男の三種競技で競い、勝者が花婿になる等の記述もある。

「元朝秘史」でもチンギス・ハーンがブリ・ボコとベルグテイの2人に相撲をとらせるよう指示したとの記述がある。おそらくモンゴルの遊牧文化がブフをはぐくんできたものである

う。男は牧畜作業の中で、自然に身体を鍛えるし、大型家畜を倒す時、「あそび」心から一人で倒し、動物と力比べをするなどの習慣が広まったのではないか。

その風土から超人的な存在としての力士——身体表現にみる勇敢さ、強靱さへの憧れが生まれたのであろう。

今でもモンゴル力士の強さには、大型家畜との格闘や牧畜作業における自然鍛錬からくる足腰の強さ、バランス感覚のよさなど、遊牧的身体が社会的に共有された伝統が息づいているように見える。日本人力士の相撲は単一方向的な「のこぎり相撲」、一方、モンゴル力士は「押し」の基本を身につけ、さ

らに左右に投げる「多方向的相撲」といえる。またモンゴル力士には、相撲以外に他のスポーツを経験しているものが多い。この経験が大いにプラスになっていると思われる。

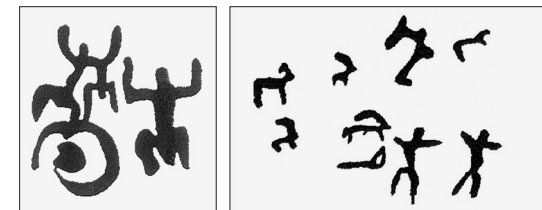


写真6 各地の壁面に登場

それにしてもモンゴル力士の功績は大きい。モンゴル国における相撲人気とそれに伴う日本文化の紹介と浸透、逆に日本におけるモンゴル国の知名度の向上、対モンゴル投資、観光客の増加などは彼らの功績だ、というのが講師の結論であった。(記 岡部滋・理事)

講師略歴

1963年 中国・内モンゴル自治区西スニド(西スニド右旗)生まれ
1985年 内モンゴル大学外国語学部日本語科卒業
2002年 モンゴル相撲「ブフ」文化の文化人類学的研究により、千葉大学で博士号取得
2012年 日本ウェルネス・スポーツ大学准教授